令和８年度　コロンボ日本人学校　学校経営計画

１、【学校経営の基底】

１、日本国憲法　教育基本法　学校教育法などの関係法規

２、学習指導要領

３、ESD（持続可能な開発のための教育）推進の手引（令和３年５月改訂版）

『本校学校経営の重点に関連する内容』

（１）学習指導要領　前文（一部抜粋）

「これからの学校には、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の生徒が、自分の良さや可能性を認識すると共に、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら、様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、**持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。**このために必要な教育の在り方を具体化することが、各学校において教育内容等を組織的かつ計画的に組み立てた教育課程である。」

（２）学習指導要領　総則　第１、中学校教育の基本と教育課程の役割（一部抜粋）

「３、２の（１）から（３）までに掲げる事項の実現を図り、**豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となることが期待される生徒**に生きる力を育むことを目指すに当たっては、学校教育全体並びに各教科、道徳科、総合的な学習の時間及び特別活動の指導を通して、どのような資質、能力の育成を目指すのかを明確にしながら教育活動の充実を図るものとする。その際、生徒の発達段階や特性等も踏まえつつ、次に掲げることが、偏りなく実現できるようにするものとする。

（１）知識及び技能が習得されるようにすること

（２）思考力、判断力、表現力等を育成すること

（３）学びに向かう力、人間性等を涵養すること

（３）ESD（持続可能な開発のための教育）推進の手引（令和３年５月改訂版）より抜粋

■ESD によって育む能力・態度

ESD によって育む能力・態度については、国立教育政策研究所の「学校における 持続可能な開発のための教育（ESD）に関する研究［最終報告書］」（2012 年３月）に おいて提示された次の六つの構成概念（例）も参考とし、自分が行っている指導が、 どの概念の理解を深めるものとなっているかを考えることが手がかりになります。そのうえで、ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度の例として、以下の七つが示されています。

―持続可能な社会づくりの構成概念（例）―

Ⅰ 多様性（いろいろある） Ⅱ 相互性（関わり合っている）Ⅲ 有限性（限りがある）

Ⅳ 公平性（一人一人大切に）Ⅴ 連携性（力を合わせて）Ⅵ 責任性（責任を持って）

―ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度（例）―

① 批判的に考える力 ② 未来像を予測して計画を立てる力 ③ 多面的・総合的に考える力

④ コミュニケーションを行う力 ⑤ 他者と協力する態度 ⑥ つながりを尊重する態度

⑦ 進んで参加する態度

このように、**ここで示されている六つの構成概念（例） と七つの能力・態度（例）を、学習指導要領における資質・能力の三つの柱に対応した観点別学習状況の評価の 3 観点と関連付けて考えることは、学校教育の中での ESD の推進につながります。**

■現在の教育課題に対応し、その解決に貢献する ESD 2020 年から急激に世界中に感染が拡大した新型コロナウイルス感染症により、従来の社会システムやライフスタイルが一変しただけではなく、上記の諸課題がより顕 在化するとともに、その解決への道筋がますます不透明化しています。今ほど、「持- 7 - 続可能性（Sustainability）」が試され、我々一人一人が国際的な連帯の下に、グローバルな視点で「持続可能な社会の創造」をめざした行動をとることが求められている時代はありません。 これまで ESD に取り組んできた学校からは、ESD が、児童生徒の心の発達や自己 肯定感の醸成に寄与することや、主体的・協働的に学ぶ力を高めること、学校と地域 との連携を促進することなどに大きく役立ったという報告が寄せられています。このように ESD を、教育課題の解決や教育改革の方向性及び方策の一つとしてとらえることも重要な視点です。 また、ESD の推進は、世界各国の未来への約束です。国連 ESD の 10 年の提唱国 である日本の学校現場で ESD の実践を進めることは、日本が世界の教育を先導することにもつながります。日頃の学校現場での取組を、SDGs の達成、そして持続可能な社会の構築につなげていきましょう。

２、【令和８年度　学校経営の基本方針】

（１）変化を実感しながら、教職員こそが主体性を持って！

『･･･学校は社会に出る前の準備期間であり、未来の社会変化を前提に教育課程が編成されねばなりません。･･･未来がどう変わるのかを予測し、そのためにはどのような学校づくりが必要になるのか、すなわち縦軸を意識した学校づくりにシフトすることが重要。』

これは、「日本教育」という月刊誌に掲載されていた大学教授の意見である。太字、下線の部分にある「縦軸」は、いわゆる「時間軸」。要するに今目の前にいる子どもたちが、社会で活躍する頃にはどのような姿になっているのだろうかということを意識した学校づくりにシフトする必要があるということである。（易者の視点で教育を考える・将来を占うという視点）

これからの時代を捉えるキーワードとして**「ＶＵＣＡの時代」**という言葉ある。Volatility:変動性、Uncertainty:不確実性、Complexity:複雑性、Ambiguity:曖昧性という四つの単語の頭文字をとった造語である。こうした言葉に代表される**「先行きが不透明で、予測が困難な時代」**を意識して教育活動に臨まなくてはならない。こうした「変化への対応」ということにおいては、今後、教職員一人一人が社会の一員としての自覚を持ちながら変化を敏感に感じ取り、そして**職員がチームとして主体的に協働し合いながら**児童生徒たちへの働きかけを充実させていくことが必要である。「主体的・対話的」に業務を進めることとはどういうことかという事を、教職員が実感せずして児童生徒へは伝えられない。教職員が変化を実感し、主体的にその変化への対応を考えていくという実践を今後とも充実させていきたい。

また、上記の「変化への対応」という側面と共に、教育基本法に掲げられている「平和的な国家及び社会の形成者としての人格の完成をめざす」という教育の不易の目的は今後も引き続き確かな働きかけが求められる。本校においては、現時点では安全・安心な環境のもと個々の内なる可能性を花開かせるという働きかけが継続されているが、**個々の児童生徒を取り巻く状況を考えた時、**新しい課題が表出することも考えられる。更に教員数の減少など、教師の負担も課題となっている。いかに無駄を削ぎ落とし、実感の持てる連携を強化しながら、児童生徒たちの生き生きとした活動を引き出せる学校づくりに努めていく。

（２）「誰一人取り残さない！SDGs 達成に向けての活動の充実」
～SDGs の日常化を目指す・授業との紐付け～

2015 年に採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」。2030 年までに世界のあらゆる形態の貧困をなくし、経済・社会・環境のバランスを図りながら、豊かな未来を築こうということで 17 のゴールを設定し、世界の国々で取り組まれている。

しかし、その進捗の速度は遅く、現状では到底この目標を実現できないと危機感を募らせている。

そこで 2020 年１月１日から「持続可能な開発に向けた行動と推敲の 10 年」として取り組みを加速することになった。本校では、「持続可能な開発目標（SDGs）」を日常的に児童生徒たちに見える・聞こえる教育活動を展開したい。

児童生徒たちに SDGs を浸透させたいと考えている。今年度は、特に総合的な学習や学校行事や各教科、道徳での内容と紐付けて、より深く鮮明に児童生徒たちへの意識付けを行い、批判的、論理的思考力の向上を図っていきたい。

SDGs が掲げる「Leave no one behind(誰一人取り残さない)」という理念を世界の一学校である本校が、実現に向けての歩みを止めていては到底世界の目標として達成できない。個々の状況に応じた最善の教育的な働きかけを常に模索しながら、世界の目標達成に向けた歩みを意識的に取り組んでいく。

（３）学習指導要領の示す資質・能力の育成

本校でもこれまで「主体的、対話的で深い学び」の実現に向けた研究活動が推進されてきた。しかし、それぞれの指導者や教科においてその取り組みは「点」として実施されてはきているが、未だに「線」となっている状況とは言い難い。入れ替わりの激しい日本人学校現場において、継続した研究体制を維持することは難しい。今年度は、それぞれの領域での学習が『各分野・教科横断的』に繋がり、子どもたちの「主体的、対話的で深い学び」を実現できるような教育課程の編成・実施に向けた取り組みを充実させたい。

３、【学校の現状】

（１）児童生徒の状況

児童生徒たちの日常全般の活動は、児童生徒同士、そして児童生徒と教師の深い信頼関係のもとに、安心、安全な生活が築き挙げられ、個々の児童生徒たちが心置きなく自己表現をすることができる環境となっていることが理想である。そうした状況は、日常の諸課題に対してある時は仲間同士そして、児童生徒と教師が真剣に向き合い、そしてまたある時は、互いに思いやりを持って支え合うという関係性から築き挙げられている。また、特に運動会や JSC フェスで見せてくれるエネルギッシュな活動と「一体感」は、児童生徒同士の関係、そして児童生徒と教師の関係性を良好なものに築きあげていると言ってもよいのではないか。

学力においては、個別には基礎的なスキルが十分とは言えない状況もあるが、対話的な活動の授業においては、双方向の良好なコミュニケーションを図り思考を深めている状況が認められる。また、体力に関する調査では良好な結果が見られ、休み時間での身体を動かした交流など大変意欲的に取り組む児童生徒が多い。

本校では、いじめ等の問題につながる児童生徒間の関係づくりに課題がある。しかし、これらの

問題はどこの学校でも起こりうることであり、日常的な観察や相談活動は不可欠である。こうした問題の解決に向けては、関係機関との連携を図ることがポイントではあるが、実感のできない連携という言葉だけを叫んでいても効果は期待できない。**学校運営委員会を中心とした関係諸機関と連絡を取り、「連携」ということを実感しながら個々の児童生徒の課題に向き合うことが重要**である。これは、本校の実態をより持続的なもの、より充実した状況にしていくためにも重視していきたい。

（２）保護者の状況

運動会や JSC フェス等では、積極的に児童生徒たちの活動を後押ししてくれたり、発表の様子を熱心に見守ってくれたり、**学校の教育活動を肯定的に捉え積極的に支援してくれる保護者が多い。**

また、学校評価における保護者アンケートでは、教育活動を肯定的に捉えてくれていると考えらる。全般的に学校への協力体制は安定していると考えてもいいのではないかと思われる。日頃から児童生徒を中心にした情報交流を行い、**信頼関係の構築に努めること**が必要である。

（３）学校運営委員会（他機関から）の視点

学校運営委員会では、本校の教育活動について肯定的な評価を頂いている。大使館・日本人会・商工会等、在住する邦人関係機関からの本校への期待は大きい。各種行事への参加による日本人コミュニティの活性化への協力を通じて、本校への各関係機関からの支援も厚くなってきている。

スリランカ政府には、「教育機関」としての認定をされていない現状があり、現地校との交流会等においてつながりが希薄になっている。しかし、**様々なつながりを活用して、交流の輪を広げていける**と考えている。今後も学校運営委員会との連携を通じて、外部人材の活用等の幅を広げていく所存である。

４、【目指す学校の姿・児童生徒の姿・教師の姿】

（１）目指す学校の姿

① 明るく活気に満ち、安心して生活できる学校
② 学ぶことが楽しく、充実感にあふれる学校
③ 人間的なふれ合いがあり、心の絆で結ばれた学校
④ 家庭・日本人会・地域と相互信頼のある学校

安全・安心な生活環境のもと、子どもたちが心置きなく自己表現することができる場

（２）目指す生徒の姿　～　３つの「シコウリョク」を身に付けた生徒　～

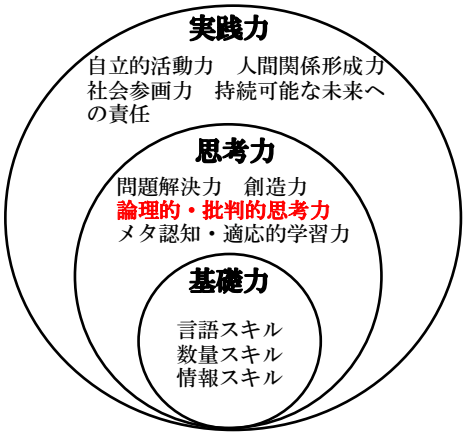
①　試行力

失敗を恐れることなく、自ら納得するまで**試行錯誤を繰り返し、最適解により近づこうと取り組む**ことができる子どもを育んでいく。

②　思考力

筋道に則って思考を巡らせて結論を導く**「論理的思考力（ロジカルシンキング）」。**他者、集団の判断や言動、態度に疑問を持ち、それが確かな根拠に基づいているかを吟味して最適解に向かって思考する**「批判的思考力（クリティカルシンキング）」。**この能力は、国立教育政策研究所が示した 21 世紀型能力の中核をなす力である。「覚える」こと以上に「思い、考えを巡らせ、深めていく」ことができる子どもを育んでいく。

【21 世紀型能力】



③　至高力

日々の生活の中でより**高い目標を抱いて、そこに至るために自分がどのような努力を継続していくこと**が必要かを考えて実行していける子どもを育んでいく。

（３）目指す教師の姿　　～３つの「ユウゲンジッコウ」を身に付けた教師　～

①「有言実行」

教育は何よりも「信頼」が基盤。「信」という字は「人」が「言」うことで形成されている。必要なのは言行一致。教育の現場では、言葉や文字にして表現したこと、互いに共有したことをきちんと実行していくことが信頼となっていくことは、言うまでもないことである。**教師は、こども、保護者の前で自らの意思を明確に表明し、それを形に表して信頼関係を深めていく。**その信頼を築いていく過程は、一日でなることはなく、目の前の一つ一つのことを着実にやり遂げこそ積み重ねられていく。しかし、その「信頼」は、失われるのは一瞬で、更に失われた信頼を回復するのは莫大な時間と労力がかかると言うことを心に刻みながら、日々の言動、行動に最大限の配慮をしながら子ども、保護者、関係機関から信頼される教師を目指したい。

②「有限実効」

日本の平均寿命は男女とも 80 年を越えている。私たちが児童生徒たちに関わるのは、80 年以上ある生涯のうちのわずか数年。しかし、学校における時間は、今更言うまでもなく一人の人生を左右する第一分岐点とも言える。**卒業後の人生も見据えて、このわずか数年という限りある期間で最大限の効果のある働きかけ**をして、児童生徒たちの成長を促していければと思う。

義務教育という限りある期間で、最大限の有効な働きかけをしていくことの大切さを噛みしめて実践していける教師でありたい。

③「優厳実行」

児童生徒は「褒められて葉を広げ、叱られて根を張り」成長していくもの。優しく「寄り添い」認める場面と厳しく「向き合う」場面を意図的にタイミングよく設定しながら、児童生徒たちの可能性を引き出していく働きかけが大切である。「厳しさ」は決して叱ることということではない。過去において厳しさの象徴とも言えた「体罰」は、今や指導方法としては論外である。では、「厳しさ」とは何か？それは自己実現への道筋を示し、考えさせ、行動させるという働きかけと捉えたい。それは、裏を返せば愛情深い行為であると言うことである。**「優しさ」と「厳しさ」は表裏一体のもの。「優しさ」の裏付けがある「厳しさ」、厳しさの裏付けあっての「優しさ」**を、児童生徒たちの心に響かせていける教師を目指したい。

５、【令和８年度　経営の重点について】

（１）重点目標の設定にあたって

上述の「経営の基本方針」「学校の現状」そして、「学校、児童生徒、教員のめざす姿」を踏まえ、今年度は下記の重点目標に向けて教育活動を推進していきたい。この**「持続可能」という言葉**を「現在」と「未来」をつなぐ、そして「地域」と「世界」をつなぐという時間軸、空間軸の両面において捉え、豊かで平和な未来を創造するために、**主体的に思考、判断し、他者と協働しながら力強く、逞しく生きていく人間性**を本校の子どもたちには身につけてほしい。

（２）本年度の重点目標

持続可能な社会の創り手として、逞しく生き抜く生徒の育成
～社会に貢献できる資質・能力の育成～
『人間関係力』『課題解決力』『人生設計力』『自立の力』

①　確かな学力の育成について

前述してきたように「「先行きが不透明で、予測が困難な時代」を生き抜いていくために必要な「生きる力」も確実に身に付けさせることも必要である。そして、それは児童生徒たち一人一人が将来的に描いた自己の姿を実現していくために必要となる。それぞれの児童生徒に応じた必要とされる「学力」にはどのような力があるのか、正に、これから求められる学力とはどのようなものなのかをしっかりと見通して、教育活動にあたる必要に迫られている。

・これから求められる学力を、前述の２１世紀型学力として捉え、**「見通し」と「振り返り」を重視しながら生徒の「主体的、対話的で深い学び」をデザイン**し、「シコウリョク」の育成を中核に据えて、基礎力、実践力の育成を図っていく
・**SDGs を視点にした教科横断的な教育課程をデザイン**する。「SDGｓカレンダー等」の作成・掲示の活動を通して各教科、領域の関連性を明確にしながら「社会（世界）に開かれた教育課程」を実施することで深い学びを実現する。
・ICT 機器の効果的な活用とタブレットによるオンライン授業等による学習活動の活性化と**家庭学習の一層の定着を目指す**ことで学習保障を充実させる。

【知能と知性の違いを意識して】

以下の記述は、これからの教育が目指す**学力の考え方**に合致するものと考える。是非とも参考としながら、児童生徒の学力を育んでいきたい。
「知能」は、人工知能、知能検査などと使われますが、人工知性とは言いません。英語では、知能も知性もインテリジェンスですが、日本語は区別します。**知能とは**知る能力ですから**「もともと答えがある問いに対して答えを出す能力」**であり、**知性は**知的である性質や性格、性向ですから**「答えがはっきりしない問いに対して、答えらしき何かを見いだす能力」**ではないかと考えました。
人間には、知能があって知性がない人がいるかもしれません。ものすごく頭が良くても、教科書通りのやり方しかできない人、知識が充分あって、分析能力も高くて、頭は良いのですが，なぜかそれほど先読みができないし、人を見る目がなかったり，臨機応変な対応ができなかったりする人

です。それに対して、**知性には人間や社会、自然などに対する「共感力」という心の部分が関わっています。そして、知性は知能が基礎的な部分として含まれます。日本語の知性には、心の部分や品格、人間性が含まれていると思います。今、子どもたちに期待したい未来への学びは、そうした知性の涵養ではないでしょうか。自分らしい学び、創造的学び、品格のある学びをして欲しいです。**

月刊「日本教育」　小松郁夫（流通経済大学教授）より

②　豊かな心の教育の充実

朝の挨拶から始まる学校生活、脈々と引き継がれてきた好ましい習慣を今後も充実、発展させて行くために児童生徒たちの豊かな心を育んでいくことは本校には極めて重要な課題の一つと押さえて取り組んで行きたい。

・道徳については、指導計画に沿った実践を行いながら、日常生活の中にある行事や児童生徒たちの生活、地域に関わる出来事等を通じて「考えさせる」「意見を交換させる」授業の活性化に努めていきたい。**SDGｓの１７の目標等を意識した実践**に期待する。

・将来的に社会に貢献できる人材を育むことに直接的につながっていく。様々な機会を通じて**「日本と世界」を見つめ直し、その発展を願う気持ち**を育てていきたい。

・**児童生徒の自尊感情を育むことは極めて重要な課題**と捉えている。行事の取組や児童生徒会活動等において子どもたちの主体的な活動を引き出す中で、**皆のために力を尽くすこと、挑戦してみる姿勢やそうした個々の努力、他に対する思いやりある行動を賞賛することで社会的自尊感情（主に自己有用感）を育み、バランスのとれた人間性を育成**していきたい。

生まれてから義務教育の課程までに**主に養育者との関わりで築き上げられてきた「自己肯定感」などからなる「基本的自尊感情」。そして、外部環境との関わりで築かれていく「自己有用感」などからなる「社会的自尊感情」。**この自尊感情の二つの側面をしっかりと把握し、個々の児童生徒たちに照らし合わせて児童理解を深め、より効果的な対応を図っていきたい。

③　健やかな体の育成

SDGsNo.２「飢餓をなくそう」やNo.３「すべての人に健康と福祉を」の２つの目標の達成に向けて、世界や地域の状況を知ると共に自分たちができることを主体的に実践していくことができるような働きかけを行っていく。

・各教科の内容と**食育との関連を絡めて**、児童生徒がより食生活を通して健康への意識を高めることができるように導いていきたい。

・家庭におけるゲーム等の時間の見直し等、**生活習慣における課題解決を目指す取組を**推進する。

・体力向上の取組の結果をより活かすことができるように、個々のデータを全教職員で共有し、**日常の遊びや体力作りの視点として補完ができるよう工夫**する。

・児童生徒会・委員会の企画等、**楽しく体力向上を図る取り組み**を実施する。

④　学校運営について

・「教職員減少と業務軽減」を視野に、**学校閉庁日の設定や定時退勤など、教職員の勤務時間の適切な管理と十分な休養時間の確保**に力を入れたい。

（３）キャリアの視点

上に示した「人間関係力」「課題解決力」「人生設計力」「自立の力」の４つは、文部科学省が示しているキャリア教育の基礎的・汎用的能力をわかりやすい言葉で言い直したものである。

①人間関係の力　「仲間とつながり、仲間をつなげる」　<第１学期重点指導事項>

人間関係形成・社会形成能力のことを示している。端的に言えば、人間関係形成能力とは「人とつながる力」であり、社会形成能力とは「人と人をつなげる力」になる。人の悩みの９０％以上は人間関係の悩みと言われているが、実際に社会に出たときに、職場の同僚との関係を調整したり、仕事を進める上で人を組織したりする力は、社会において最も求められるものである。

このためにも、教科指導や道徳科などで、対話を重ねながら課題解決にあたったり、総合的な学習の時間で、協働的な学習を進めたり、特別活動において、合意形成や集団の中で自分の役割を発揮する経験をつんだり、委員会活動において上下関係を学んだりすることが求められる。

②課題解決の力　「個別最適な学びと協働的な学び」　<第２学期重点指導事項>

キャリア教育では、生きていく上で発生する様々な課題に対して適切に解決方法を見いだしていく力を示している。これからの時代は、コロナ禍での社会構造の変化、ＡＩの発達等、今まで経験したことのない社会の変化が待ち受けており、予測困難な様々な課題に直面することが予想される。その都度、仲間とつながり、仲間をつなげながら、一人一人の「学び」を生かし、協働的な「学び」を展開する中で、課題を解決していくことが求められる。

この土台になるのが、教科指導における課題解決学習であり、総合的な学習の時間における探求的学習であり、特別活動における実社会の縮図としての集団活動になる。学校における様々な課題解決の体験が、そのまま実社会での課題解決能力につながるよう意図的な指導が求められる。

③人生設計の力　「地域との出会いから学ぶ」　<第２学期重点指導事項>

キャリアプランニング能力のことを示している。自分自身の夢を実現させるために、世界の発展のために日本人の一人として学ぶことが、「学びに向かう力」を育てることになり一人一人の自己実現につながっていくことになる。

社会で貢献できる力を育てていくためには、学校の学びと社会に出てからの生き方をつなげていく必要がある。特に総合的な学習の時間において、他の関係機関や他校との接点を深める活動を進めながら、児童生徒に学びの意味を感じ取らせる学習を進めたい。

④自立の力　「集団的自立」　<第３学期重点指導事項>

自己理解・自己管理能力のことを示している。特に自己肯定感を高めるためにこの力の育成が重要である。ポイントは「集団としての自立」の力を身に着けることにある。「４つの資質」を身につける上でその土台となる「仲間とつながり、仲間をつなげる」力を生かして、「集団としての自立の力」を育てる中で、「個としての自立の力」を育てていきたい。特に中学部において、義務教育最後の３年間の集大成として、仲間と共に持続可能な社会を創造していくための「自立の力」を身につけさせたい。

（３）目標達成のための具体的な手立て

⑴　学力の向上

①　基礎基本の定着のための手立て

○　少人数の利点を生かした個別支援

○　国語、算数の補充授業の実施

②　国語力の向上（話す・聞く、書く、読む能力）

○　全校朝読書、国語科における作文指導の充実

○　日本語補充学習の実施（ＪＳＬ）

③　多様な進路に対応した進路指導

○　海外子女教育財団との連携

○　外部の教育資源の活用（人、企業、施設）

⑵　心の教育・生徒指導の充実

①　社会体験活動の充実による社会性とコミュニケーション力の向上

○　**外部講師の活用や社会見学等、外部との交流の推進**

○　日常的なあいさつなどの継続的な指導

②　少人数のよさを生かした人間関係づくり

○　各種集会や行事で児童生徒が主体的に活動できる場づくり（運動会、ＪＳＣフェスティバル等）

○　発達段階に応じたきめ細かい個別指導（教育相談）

③　いじめ防止基本方針を踏まえたいじめ撲滅の取組

○　特別の教科道徳の授業等での心の教育の推進

○　児童生徒会活動を生かした支持的風土の醸成

⑶　体育、健康・安全教育の充実

①　全校で継続した体力づくり

○　朝運動や縄跳び週間、縄跳び検定、スポーツクラブ等における運動能力の向上

○　水泳授業の実施と保健・体育指導の充実

○　キャンディアンダンスの授業の実施

②　健康・安全教育の充実

○　自分の健康を自分で保てるようになる学級活動（指導）等での指導

○　**緊急時対応訓練の実施**やバスの安全利用のための指導

⑷　国際理解教育

①　英語力の向上

○　全学年週３回の外国語活動（ＥＣ）と発表会の実施

○　ＣＴＥ（コロンボタイムイングリッシュ）による英語力の向上と実用英語検定の実施

○　イマージョン教育（英語以外の授業で英語を使った授業を行う）の実施

②　総合的な学習の時間での国際理解教育に関わる学習の充実

○　ＩＡ（インターナショナルアクティビティ）の実施

○　スリランカ理解学習（校外学習・キャンディアンダンス等）と発表会の実施

○　**現地校との交流や他の在外教育施設、日本国内の学校とのオンライン交流活動**の実施

⑸　信頼される学校づくり

①　学校運営

○　校長を核とし、**校務分掌組織を中心とした組織的な学校運営を推進**する。

○　グループウェアと職員間の炉辺談話を生かし、情報交換と会議の充実を図る。

○　学校評価アンケートを年２回実施し、短いスパンで学校の課題に対応したＰＤＣＡサイクルの確立を図る。

②　危機管理の徹底

○　定期的な避難訓練の実施とそれに応じた安全対策マニュアル等の見直しと改善を図る。

○　常に児童生徒一人一人の動向に注意を配り、学校事故を起こさないように努める。

③　教職員の言動

○　児童生徒の人格を尊重し、**言葉遣いや行動が児童生徒の模範となるよう**心がける。

○　グローバル人材育成の観点から、差別・偏見や誤解につながる表現には留意する。

⑹　保護者、日本人会、関係機関等との連携

①　教育活動の紹介、報告

○　学校だより、学級だよりの定期発行およびインターネット（HP・SNS）の活用による広報の充実

○　保護者懇談会の工夫による学級担任と保護者の連携強化

②　連携した教育活動の推進

○　運動会の日本人会との共催、外部の専門家の講師依頼

○　ＪＳＣフェスティバル等の日本人会、関係機関、交流学校への案内

（４）　特色ある教育課程

⑴　外国語教育の充実

①　週３回（３つのコース別）の現地のネイティブ英語教師による外国語活動（ＥＣ）

②　実用英語技能検定資格取得を目指した授業（ＣＴＥ）

③　イマージョン教育（水泳授業、キャンディアンダンス）をとり入れた授業

⑵　国際理解教育・現地理解教育の充実

①　隔週現地講師によるキャンディアンダンスの授業

②　現地の学校との交流会

③　オンラインによる他の在外教育施設（カラチ日本人学校）や日本国内の学校との交流

④　教師による国際理解教育ＩＡ（インターナショナルアクティビティ）の授業

⑶　日本の伝統的文化の継承

① 和太鼓の授業
② 百人一首、昔遊び体験
③ 書初め大会

⑷ **体力の向上**

① 隔週２時間現地コーチによる水泳授業の実施
② 週１回朝運動の実施
③ 隔週のキャンディアンダンスの授業
④ 縄跳び週間、縄跳び検定の実施

⑸ **ＩＣＴを活用した教育の充実**

① 校内研究の充実
② オンライン授業のスキルを活かした授業の推進
③ iPad 等を活用した授業の開発
④ ICT を活用できる教師のスキルアップを目的とした研修の充実
⑤ プログラミング教育の推進(総合的な学習の時間での取組)

（５） 令和８年度の重点施策

⑴ 新学習指導要領のねらいを踏まえ、確実な実施と基礎学力の定着
⑵ ＩＣＴ教育を活かした効率的な授業の推進
⑶ 外部教育資源を生かした学習の推進（外部講師の積極的活用）
⑷ 英語力の向上に向けた実践と指導計画の整備
⑸ 児童生徒の情報共有のための職員間の報告、連絡、相談などの連携強化
⑹ 経費削減対策の推進